

高規格堤防に関する主なQ&A①

Q1: 高規格堤防とは何か。

A1: 通常の堤防と比較して堤防の幅を高さの30倍程度とする幅の広い堤防であり、施設の能力を上回る洪水等に対し、決壊の要因である「浸透」、「侵食」、「越水」から堤防決壊を回避できる唯一の手法です。

Q2: 高規格堤防は必要あるのか。

A2: 人口・資産が高密度に集積する首都圏・近畿圏の大部分がゼロメートル地帯などの低平地にあるため、堤防が決壊すると、自然排水が困難なために浸水が長期化する上、避難場所となる高台も少ないことなどにより、甚大な人的・経済的被害が発生する可能性があります。堤防決壊を回避できる唯一の手法は信頼性・確実性の面から高規格堤防です。

Q3: 高規格堤防の整備はどのようなところで実施するのか。

A3: 高規格堤防の整備は昭和62年から実施していましたが、平成23年に「人命を守る」ということを最重視して、堤防が決壊したときに、甚大な人的・経済的被害が想定される荒川、江戸川、多摩川、淀川、大和川の5水系5河川におけるゼロメートル地帯等の約120kmに整備区間を限定したところです。(従前の対象は約870km)

【補足】

具体的には、

- ①堤防が決壊すれば十分な避難時間もなく海面下の土地が浸水する区間
 - ②堤防が決壊すれば建物密集地の建築物が2階まで浸水する区間
 - ③堤防が決壊すれば破壊力のある氾濫水により沿川の建物密集地に被害が生じる区間
- とし、氾濫形態や地形等を考慮して抽出しています。

Q4: 高規格堤防ではなく、アーマーレビーなどの手法で代替できるのではないか。

A4: アーマーレビーなどは、堤防の決壊要因の一つである越水に対して機能を確実に確保することが技術的に確立しておらず、決壊を防止することができません。

高規格堤防に関する主なQ&A②

Q5: 整備に長期間を要する高規格堤防では効果を発揮するのに時間がかかるので意味がないのではないか。

A5: 高規格堤防の整備は一定の期間を要しますが、一部区間での整備や暫定的な断面での整備であっても、「浸透」、「侵食」、「越水」に対する堤防の安全性は格段に向上します。また、氾濫時の避難場所や様々な活動拠点としての効用を発揮するとともに、木造住宅密集地域や狭隘道路の解消などによる良好な住環境を提供できます。

Q6: 高規格堤防を行うために他の箇所でも堤防強化が後回しになっているのではないか。

A6: 高規格堤防整備区間以外においても、計画高水位以下の水位の流水を安全に流すために、ドレーン工法や遮水工法などの「堤防強化」を実施するとともに、堤防決壊を少しでも遅らせ、避難時間を稼ぐことも目的とした「危機管理型ハード対策」として堤防構造の工夫も実施しています